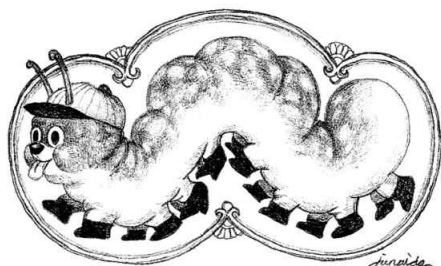


朝日歌壇俳壇



＜日曜日のプローチ 27＞ junaida

短歌時評 共作の可能性

山崎 聡子

「ここ何年か、二人の歌人の共著による短歌集を目にするようになった。以前は穂村弘と東直子の『回転ドア』は、順番に『が目立つ程度だったが、木下龍也と岡野大嗣の『玄関の覗き穴から差しこく光のように生まれたはずだ』、同じく木下と鈴木晴香の『荻窪メリーゴーランド』など、SNSなどにも取り上げられ、広く読者を得た本も多い。恋の始まりから終わりまでを散文と短歌で見せる『回転ドア』、二人の男子高校生の七日

間を描いた『玄関の覗き穴』、ミステリータッチのラブストーリーが展開する『荻窪』——どれも二人の言葉のセッシヨンがスリリングで、贈答歌の文脈をもつ短歌ならでは、と言えそう。そんな共著歌集の最新刊がくどうれいんと染野太朗の『恋のすべて』だ。愛してるって告げているのにこの喉をびっしり塞いでゆく秋の蝶（染野）湯呑のように分厚い月がふたりの影伸してひとつのばけものにする

（ペリ）／「嫉妬」ファッション誌「Numero TOKYO」の連載を元にした本書は、「水族館」「連れたる」などの題詠を元に、古典的な歌題である「恋」が描かれる。面白なのは、共通の物語を語ろうとしていた先の三冊と異なり、レトリカルで内省的な染野の歌と、言葉が自由に跳ね回ることの歌が物語として交わることがないことだ。にもかかわらず、そこには共作による化学反応が存在し、短歌という「個」に帰結しがちな表現を風通しよくしている。瀟灑な装丁も含め、外に開かれた短歌の可能性を感じる一冊だ。（歌）

風信

第12回佐藤太郎短歌賞 現代短歌社主催。山中律雄さんの第6歌集「光園」（現代短歌社）に決まった。

渡辺松男歌集「あぢさゐだつたらあぢさゐの中」第12歌集。「記憶にも肉身がある」とあとがきに記す。「かがみの奥のわたしから手ののびてきてどんなにのびてもわれへとどかぬ」（書肆侃侃房・2530円）

☆は共選作。入選作はデジタル版などに掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300。短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（週に2作品まで）。

かけてきた人の名の出るスマホには昭和の電話のときめきがない（観音寺市）篠原 俊則
母に姉に似てきた人ら集まりて父に似てきた人を見送る（京都市）八重樫妙子
どの車もフロントガラスいっぱいに乗せたる秋の一面の雲（藤沢市）新井 敦子
三歳が父と繋ぐの嫌がつて兄とは繋ぐ手祭りの雑踏（朝霞市）小峰 拓朗
下山して麓の温泉より見上げ見る御鉢巡りし由布岳山頂（竹田市）佐藤 政俊
ガザ報道慣れてはならじまきに殺されるは昨日と別の子（札幌市）姉崎 雅子
☆空爆のガザで子供が画面に叫ぶ「私は景色ではないわ」（高松市）島田 章平
ハリガネムシは宿主を水辺に向かわせるしらずに戦争はじまるように（新潟市）太田千鶴子
夕暮れにひとを思へば暮れ難し行きつ戻りつ飛ぶ銀蜻蛉（甲賀市）幅尾 茂隆
嘘つかず人の邪心に染まらぬか世界で初のA I 閣僚（石川県）瀧上 裕幸

【評】篠原さん、誰からの電話かと、受話器を取る一瞬の期待と不安。昭和懐かし。八重樫さん、姉妹が集まって兄が弟を送るのだろうか。互いに似てきて一層哀しみが募る。十首目、アルパニアではA I が汚職対策閣僚に。この動きは加速するののか。

十七歳の闇はいかほど逝きし娘の星ひとつぶのピアスの遺影（市川市）山崎 蒼子
英会話ネットで学べば先生の声にかぶさるインドの祭り（京都府）片山 正寛
亡き妻の夢見るたびに繰り返す病院に行くと声を噎らして（市川市）をがはまなぶ
☆空爆のガザで子供が画面に叫ぶ「私は景色ではないわ」（高松市）島田 章平
不安ゆえ人とのつながり求めんとキーウの路上で花売る娘（石川県）瀧上 裕幸
誰へ向けての気遣いだらうフェミニズムの本はカバリーをかけてから読む（柏市）伊藤 智紗
近づけばすぐに避けられ速くから見詰めるだけのお掃除ロボット（中津市）瀬口 美子
夏服は秋の陽射しの店の奥員般ボタンのはずれしまに（甲賀市）幅尾 茂隆
落とされた落ちた落としたとれなのか分からずシャツはベランダに（浜松市）かいはりまな
言いづらいつことをとれほど告げたらう少し早口になる医師は（秋田市）惟今 実生

【評】一首目、ピアスが亡き娘の苦しみのように光る。二首目、オンライン授業は遠いインドと結ばれている。三首目、早く診てもらっておけば、という痛恨の思いが見せる夢か。四首目、風景のように眺めていないで助けて、という叫びだ。

ロジハラをしてくる上司にロジハラで返し裁判所となる職場（東京都）富尾 なつ
いつまでも家庭菜園やる気だった牛糞二トン買っていた亡父（桐生市）久保塚文子
「あなた誰？」服を着てるとわからないブルー仲間と異世界で会う（江別市）長橋 敦
注文も支払いも皆タブレット立って見ているロボット型ヒト（岡崎市）近藤 義孝
愛犬と話す時だけオクターフ高い声出す夫と息子（流山市）坂本真衣子
古寺の池面に映る彼岸花浮上の鯉がときどき揺らす（厚木市）北村 純一
その人の作り笑いの深き皺液晶越しに視つつ柿食む（高槻市）花田一登真
ふるさとの秋の海辺に人はなくゆめりどと回る発電風車（横浜市）白川 修
新聞を見ながら私の料理食べ後はゴロ寝の夫と四十年（さいたま市）石田 恵子
生ハムを予は真桑瓜吾は老荷巻いて食みたり秋の食卓（高知県）原 真由美

【評】第一首、職場の小事件をクローズアップした一首。「ロジハラ」とはロジカルハラメント。つまり正論をふりかざして論理的に追いつめること。第二首、亡き父上が残した二トンもの牛糞。長生きする積もりだったのだ。

ネタニヤフーチン・トランプ・習近平 彼らの顔を見ない日がほしい（前橋市）町田 香
トランプのアメリカファースト意識なら唯我独尊、我田引水（川崎市）杵淵 有邦
新米を食べれば浮かぶ麦飯の茶碗に光る米の粒々（磐田市）深田 茂夫
この頃はクラスに一人居るといふ不登校児童少子化なのに（尼崎市）小石 絹子
終活に古本五冊売りに行き古本五冊買つてしまひぬ（延岡市）片伯都り子
病棟に朝日新聞ありと言ふ夫はわれの短歌を待つらし（長岡市）桜井奈穂子
備し妻と生きおり（町田市）若山 哲男
軽トラは田舎のベンツ農夫らは野良着のままに街へ繰り出す（安中市）岡本千恵子
朝刊を手を受けたまま見送りバイクの背の角曲がるまで（岡山市）岩藤由美子
タブレットで注文をしてロボットが運ぶ料理はデジタルの味（東京都）富永 清美

【評】1 首目、同感する人が世界中にいま無数にいるだろう。2 首目、「唯我独尊、我田引水」とは見事な意識ですね。3 首目、かつてのご飯は麦飯で、米粒が少し混じって光っていた。4 首目、児童数は減り、不登校が増えた悲しさ。

● 永田和宏選

● 川野里子選

● 佐佐木幸綱選

● 高野公彦選